

立教関係者一名の追放とその後

鈴木勇一郎

はじめに

一九四五年一〇月二四日にGHQが発した覚書「信教の自由侵害の件」は、戦時中のキリスト教学校における信教の自由の侵害および蛮行を糾弾し、

- ① 立教学院職員一名の追放。
 - ② 一名の再任用の禁止と政府機関等への再就職の禁止。
 - ③ 立教学院の再建。
 - ④ 他のキリスト教学校での戦時中の信教の自由の侵害と蛮行の報告。
- という四項目を指令した。これによって立教学院関係者一人名が教職を追放されるという事態となった。彼らにかけられた「容疑」は次の二つにまとめることができる。

① 一九四三年、キリスト教に基づく授業、儀式の廃止。
② チャペルの閉鎖と蛮的行為^①。

この事件は、戦後の立教学院の出発であるとともに、占領史においても一般の教職追放に先駆けた事例として、とり上げられることが多い比較的メジャーなトピックである。

占領下における教職追放について検討した山本礼子は、立教関係者の追放と再審査、解除の過程を具体的に検討し、GHQ内部における教職追放をめぐる主導権の移行過程の一環として、この事件を捉えた^②。山本も含めて論者の多くは、占領政策の一環としての位置づけに関心が集中しており、立教のことに直接関心があるわけではない。

立教大学における自校史のテキストとして編纂された『立教大学の歴史』では、この事件によって戦時中の

「苦渋に満ちた立教の決断のあり方が厳しく問われ」、「学院首脳部」が立教を去ったとして、追放に至るまでの過程に焦点を当てている⁽³⁾。ひとことでは、戦時中の弾圧と抵抗や妥協といった視点の延長線上に位置づけている。

ところがこの問題は、彼らが立教から追放されて終わりという単純なものではなかった。実は彼らのうちの半分近くが、数年を経ずして追放を解除されるという事態となっていたのだ。公職追放解除とそれに追隨して行われた教職追放解除が本格化したのは、一九五一年以降のことであり⁽⁴⁾、一九四六年から四八年という早い段階で行われたこと自体、異例だった。つまり、一人名の追放自体も教職追放に関する一連の指令が出される前に実行されたという点で異例だったが、その後の展開も異例づくめだったのである。従って、この問題については、追放の過程だけでなく、それが解除されていく経緯も一連のものとして把握する必要がある。

追放については、追放された教員の一人である縣康が回想を残しているが⁽⁵⁾、この他の関係者はほとんどこの問題については語っていない。『立教学院百二十五年史』でも、縣関係の資料を中心に収録している⁽⁶⁾。追放とその解除の事情については、縣の語る物語にほぼ独占される状況となってきた。特に追放された他の十名がその後

どうなったのかについては、ほとんど触れられることがなかったのである。

本稿では、一人名の人々の追放とその後の経緯を具体的に明らかにしていくことで、戦中から戦後にかけての立教内部の構造とその置かれていた位置を再検討してみたい。

1、一人名の人々

まず、一九四五年一〇月二四日に追放された人物を確認しておく。GHQが指名した一人名は次のとおりである。

- (1) 三辺金蔵(総長)
- (2) 帆足秀三郎(学監・中学校長)
- (3) 辻莊一(予科長)
- (4) 金子尚一(学生主事)
- (5) 宮崎伊佐夫(学生主事)
- (6) 小沢淳男(学生主事)
- (7) 柴田亮(学生主事)
- (8) 縣康(教員・前学生主事)
- (9) 和田(正俊)大尉(理学部長事務取扱)
- (10) 武藤安雄(図書館司書)
- (11) 阿部三郎太郎(教員・前学生主事)⁽⁷⁾

ここに掲げた氏名や肩書は英文をそのまま訳したものだ。フルネームでない場合や肩書が正確ではないというレベルであり、正式な指令としてはかなり雑な印象を受ける。『立教大学の歴史』では、この一一名を一括して「首脳陣」とか「立教学院幹部」と呼んでいるが⁽⁸⁾、総長である三辺金蔵、学監帆足秀三郎の二名を除けば、すべて予科に所属する教員だった。役職に就いている場合も予科長や図書館長、学生主事といったものであり、理事長はおろか学部長も一人も含まれていない。つまり追放された教員のほとんどは予科の教員であり、その多くが学生部関係者だった。「立教学院幹部」というには「小者」揃いという印象を受ける。縣康によれば、戦時中の学生部は「超国家主義者の拠点」であったという。

① 追放解除、立教大学に復職。

- ・ 縣康（一九四六年五月八日）
 - ・ 辻莊一（一九四七年六月二七日）
 - ・ 武藤安雄（一九四七年三月四日）
- ② 追放解除、立教大学に復職せず。

- ・ 阿部三郎太郎（一九四八年一月一日）
 - ・ 宮崎伊佐夫（一九四八年三月二五日）
- ③ 一九五二年に追放解除。

- ・ 三辺金蔵
- ・ 帆足秀三郎
- ・ 金子尚一
- ・ 小沢淳男
- ・ 柴田亮
- ・ 和田正俊

第三のグループの中でも帆足秀三郎、金子尚一のようにその後立教に復職した人物もいる。さらに（1）解除申請したが認められなかった、（2）解除申請しなかった、に分けることができる。

どうして処遇にこのような差が出てきたのかは、これまでほとんど明らかになっていない。そこで次に、彼らが追放されて以降の過程、またその後の身の振り方を具体的に見ていこう。

2、学院幹部

（1）三辺金蔵（総長）

一八八一年に神奈川県で生まれた三辺金蔵は、苦学して立教中学校を卒業後、慶應義塾大学理財科を一九〇八

年に卒業した。欧米留学から帰国後、一九一五年に同大
学理財科教授に就任し、その後経済学部長を歴任し
た。⁽¹⁰⁾そして一九四三年に遠山郁三の辞職後、立教大学
総長（就任時は学長）に就任したのである。結果的に、
戦時中に立教大学総長の職を受けたことで、戦後教職追
放に遭うということになった。

追放後の一九四五年一二月、前総長三辺金蔵は、立教
学院に対し弁明書を提出し、五点にわたって戦時中にお
ける自らの行為を弁明した。

① 寄附行為から基督教主義という文言を削除したこと。
（弁明） 前学長時代に決定したこと。自分はまだい
なかつたので責任なし。

② チャペルを閉鎖し基督教教育を廃止したこと。
（弁明） 実施したのは自分だが、前学長時代に決定
したこと。

③ キリスト教信者を解職したこと。
（弁明） 戦時中に解職したのは、文学部の閉鎖など
によるもので、キリスト教徒だからといっ
て解職した例は皆無であり、全く身に覚え
がない。

④ 礼拝堂などに蛮行を犯したこと。
（弁明） 空襲への対処などから切羽詰ってやったこ
とで、当時としては仕方なかつた。

⑤ 戦後も信仰の自由の回復をはからなかつたこと。
（弁明） 混乱にかまけてそこまで手が回らなかつ
た。⁽¹¹⁾

弁明書は三辺だけでなく他の被追放者も提出している
が、立教学院に提出した後、GHQに渡されたのかどう
なのを含めて、どのように取り扱われたのかは、現在
のところ不明である。ただ結果として、この時点では追
放解除に向けた具体的な動きが見られなかつた。

三辺の弁明についても少し具体的に見ていこう。実
は①、②に関しては、三辺の指摘する通り、彼が総長に
就任する以前に実行、ないしは決定されていたことであ
り、決定にあつたの直接の当事者であつた松崎半三郎
や遠山郁三が何ら責任に問われていないことを考えると、
さすがに三辺の責任を問うことはおかしいと言える。

次に③のキリスト教信者を解職したということに関し
ては、彼の在職中に多くの教職員が解職されたことは事
実だ。だがこれに関しても、当時、国策で文系部局の整
理縮小を迫られている中で行われたものであり、キリス
ト教徒を狙い撃ちしたものではないといふ弁明は成り立
つ。⑤については、総長の職にあつた時の話であり、責
任があるとは言えるが、混乱期の教か月に無作為でいた
ということであり、少なくとも積極的な行為によるもの
ではない。つまり客観的に見て①、②、③、⑤は責任が

ない、ないしは軽いと考えられる。だが④については、総長である三辺が直接指示を出して行われたことであり、責任を免れるのはかなり難しいと言わざるを得ない。つまり三辺の場合は、主に④項、つまり一九四四年のチャペルに対する責任が実質的に問われたという可能性が高い。結局、三辺については、占領が終了した一九五二年まで追放が解除されることはなかった。

(2) 帆足秀三郎（大学学監兼中学校長）

同じようなケースとしては立教中学校長および学監を務めた帆足秀三郎がいる。北辰一刀流の開祖千葉周作の曾孫千葉秀三郎として一八九三年に生まれた帆足は、立教中学校を経て一九一七年に立教大学文科を卒業した。在学中は立教学院ミッションに所属するとともに、その機関誌『築地の園』の編集に力を注ぐなど、学内でのキリスト教伝道活動には特に熱心に取り組んだという¹²⁾。その間、帆足家に養子として入り、帆足秀三郎となっている。その後、聖公会神学院で学んだ後、一九一九年に立教中学校教諭に就任し、一九三六年から校長を務めた。このように帆足の立教におけるキャリアは長らく中学校に限られていたが、一九四四年からは立教大学学監となり、大学にも関わるようになった。学監という役職の位置づけや権限はよく分っていないが、他の大学の例から

考えて総長の職務を補佐する役割だったものと思われる。

実際、一九四四年にチャペルの資材を防空壕の資材に転用することになった際、予科長辻莊一は三辺総長および帆足学監の指示を受けて作業を行なったように回想しており¹³⁾、学内を監督する地位にあったことは確かであろう。少なくとも一九四四年の段階で帆足は、意思決定に関与し得る立場にあったことはまちがいないようだ。そうした意味で一九四二年の寄附行為の変更はともかく、一九四四年のチャペルに対する件では、責任がなかったというのは難しいだろう。

追放後の一九四五年一月に三辺や辻ら、追放された旧教職員が弁明書を提出しているが、帆足については弁明書を提出したことは確認できない。

かといって、追放解除に向けた動きを全くしなかったというわけではなく、大学時代に同級生であった早崎八洲（社会学者）に「君今度ライフスナイダー先生に会ったら、僕が自分の考えでピュウを使ってしまったのではない。決してそんな人間ではない、と釈明してくれないか」と頼んだともいう。早崎によれば、その後ライフスナイダーに会った帆足は「配属将校の命令に従わないと立教は潰されます」と言ったのに対し、ライフスナイダーに「つぶされたら私たちがまた帰って来て再興します」と返されたという¹⁴⁾。

いずれにせよ、帆足の追放解除は占領が終了した一九五二年になったことは確かだ。その後、帆足は立教に復帰し、立教中学校講師や学校法人立教学院評議員や理事を歴任している⁽¹⁵⁾。

3、追放解除・復職組

三辺や帆足のような、実際に学院や大学の幹部だった人物が、戦時中の意思決定に関わる部分で責任を問われるのは、ある意味やむを得ないかもしれない。

だがすでに触れたように、他の人々は学院や大学の「首脳陣」や「幹部」と位置づけるのは、必ずしも当を得たものではなかった。次は、そうした人々に下された教職追放という処分に対して、彼らはどのような対応をしていたのかを具体的に見ていきたい。

(1) 縣康(学生主事)

最初に追放解除に向けた具体的な動きを始めたのが、予科教授であった縣康である。

縣は、三辺らと同様に一九四五年二月二日に立教学院に対し「弁明書」を提出しているが⁽¹⁶⁾、実はそれ以前からY M C A総主事斎藤惣一を通じて民間諜報局(C I S)のポール・ラッシュ(元立教大学教授)に陳情していた

⁽¹⁷⁾ さらにその勧めに応じて一月二〇日には、すでに英文の請願書を提出し、追放の解除を要求していた⁽¹⁸⁾。

縣の主張は、自分は立教に就任以来、一貫してキリスト教徒として誠実に身を処してきたのであり、戦時中には軍国主義者からさまざまな圧迫を受けてきた。にもかかわらず、戦後になって軍国主義者呼ばわりされるのは誤解だ、というものであった。

G H Qにおいて教職追放を直接所管したのは民間情報教育局(C I E)だったが、日本国内における情報収集は参謀2部(G 2)傘下の民間諜報局(C I S)の所管であり、その指揮下で直接調査に当たったのが対敵諜報隊(C I C)と呼ばれる部隊だった⁽¹⁹⁾。C I C四四一支隊は一九四五年一月二三日に縣の調査の依頼を受けていた⁽²⁰⁾。二月三日、その首都第八〇班に、縣についての再調査を命じた。これを受けて一九四六年二月、C I C特殊諜報員八五六六が縣について調査を始めた⁽²¹⁾。

特殊諜報員八五六六は、二月一四日Y M C A総主事斎藤惣一、二月一五日総長事務取扱須藤吉之祐および学院チャブレン竹田鉄三⁽²²⁾、三月四日には日本基督教団牧師白戸八郎と、次々に関係者から事情聴取を行っていた。彼らはいずれも、戦時中においても縣が敬虔なクリスチャンであり、軍国主義に加担したことなどなく、また学校の意思決定に参加できる責任ある地位にあったわけ

でもなかったことを証言した。また、高松孝治（元大学チャプレン）、佐々木鎮次（日本聖公会主教）、白戸八郎（日本基督教団牧師）がポール・ラッシュに送った書簡でもそれぞれ、縣の身の潔白を主張していた。なお特殊課報員八五六六は、二月一六日には縣本人へのインタビューも実施している⁽²³⁾。

さらに白戸へのインタビューと同じ三月四日には、警視庁の資料も調査している。そこでは、縣が一九四五年二月以降、縣は反戦思想の持主として警察の監視下に置かれ、五月には学生主事も辞任を余儀なくされていたことも判明した⁽²⁴⁾。

これらの調査に基づいて、CIE局長ダイク准将は、縣は反軍国主義者であり、敬虔なクリスチャンであったとして、立教大学に復職させるのが適当と結論づけ、一九四六年五月七日、正式に縣の追放解除と大学への復職を指令した⁽²⁵⁾。

(2) 辻莊一（予科長）

縣に続いて解除に向けて動き出したのが、辻莊一であった。辻は一八九五年生まれ。東京帝国大学文学部心理学科を卒業後、一九二二年立教大学講師となり、一九二七年予科教授となった⁽²⁶⁾。一九四三年に予科副長、その後予科長となっている。予科長は大学生の前期

教育を行う課程である予科のトップだが、辻によれば立教大学の予科長は、人事やカリキュラムを含め、ほとんど実質的な権限はなかったという⁽²⁷⁾。

辻は三辺らと同様に一九四五年一二月に弁明書を提出している。文章は詳細で多岐にわたるが、要約すると、次のような内容であった。

学校の基本的な方針を決定するのは学院の理事会であり、当時予科副長にしか過ぎなかった自分は、キリスト教主義の放棄を含む学校の方針に従わざるを得なかった。礼拝堂の内装を防空壕の資材に転用したことも、三辺学長と帆足学監の指示に従ったままであり、あの時はやむを得なかった⁽²⁸⁾。

縣とは異なり、辻に対してはこの時には、GHQ側に具体的な動きは見られなかった。

辻はその後、一九四六年一二月に再審査を要求した⁽²⁹⁾。なおこれには、帆足秀三郎（元大学学監）、三辺金蔵（元大学総長）、縣康（元予科教授）、須貝止（日本聖公会主教）、阪井徳太郎（同志会会長）による、それぞれ辻の主張を裏書きするような内容の書簡を添えている。

一九四六年一二月二七日、辻自身がCIE局長に書簡を送り、追放解除と大学への復職を要求した。ここでも礼拝堂の内装を防空壕の資材に使ったのは、学長など大学幹部の指示によるもので、自らはそれに従っただけで

あり、戦時中は学院や大学の意思決定に関与できる立場にはなかつたと、弁明書で訴えた内容を繰り返し主張している⁽³⁰⁾。CIEはCISに調査を依頼し、辻の主張がおおむね正しいことを確認した⁽³¹⁾。

だが、これに対して異を唱えたのがCISのポール・ラッシュであった。彼は、「戦時中の辻は命令に反対せずに唯々諾々と蜜行に加担した上に、立教の松崎半三郎理事長と佐々木順三総長が、解職された教員は復職されるべきではないと考えている」として、辻の追放解除と復職には反対した⁽³²⁾。

立教側が復職に反対しているというのは、あくまでもポール・ラッシュによる主張であり、辻のケースに限ってみると、松崎や佐々木がこうした主張をしたことは、現在のところ史料的には確認できない。だが後で見ると、立教学院・大学の幹部が追放された旧教員の復職に反対するということは十分あり得ることだった。

一方、CIE教育課長補佐ジョセフ・トレナーは、重要なのは辻が破壊行為や蜜行に関与したかどうかであり、関与がなかつたということが立証された以上、速やかに復職させるべきである。そもそもそういう口出しをしてくるのは、CISによるCIEに対する越権行為だと反論した⁽³³⁾。

実は、戦時中に予科講師だった細入藤太郎は、「一九三七

年、木村重治博士時代以降の立教の歴史の回顧」（以下「細入メモ」と略称）と題して、戦時中における立教大校内の対立構造について、詳細な証言をしている⁽³⁴⁾。具体的には、後で触れる武藤安雄の再審査の際に提出されたもののようなのだが、GHQの判断には大きな影響を与えたことは確かだ。

このメモの中で、戦時中の辻は経済学部長河西太一郎や予科教授阿部三郎太郎と親しく、予科教授武藤安雄らのグループと激しく対立していたことが指摘されている。こうした学内対立の一方の当事者であったことが、戦後の学院首脳部が辻の復職に逡巡した大きな要因だったのかもしれない。

だが結局、CIEは一九四七年六月一七日に、辻荘一の追放解除と立教大学への復職を指令した。辻の追放解除問題について検討した山本礼子は、この過程でG2による追放審査に対する干渉を排除し、CIEによる主導権を確立したとしている⁽³⁵⁾。辻の場合では、立教側の事情への配慮を要求するポール・ラッシュらG2系の部局の主張を退けたことは確かだ。だが、後で見ると、その後も「学内事情」が審査に大きな影響を及ぼすような事例がなくなることはなかつたのである。

4、追放非解除組

縣や辻のように、早い段階で追放の解除と大学への復職を果たした教員が出る一方で、占領終了まで追放が解除されなかった人々もいる。

(1) 金子尚一(学生主事)

一九〇〇年生まれの子金子尚一は、立教大学文学部英文学科在学中から「秀才の誉れ」が高く、一九二五年卒業後ただちに文学部助教授となり⁽³⁶⁾、アメリカに留学してケニオン大学で学位を取った⁽³⁷⁾。さらに一九二九年には予科教授に就任している。一九四四年四月立教大学学生部副部長、さらに一九四五年四月からは立教大学学生部長を務めていた。金子は他の人々と同じく一九四五年一〇月教職追放となっている。ところが、その翌月の一九四五年一月には「連合軍総司令部顧問」に就任している。そこで彼が具体的に何をしていたのかは、現在のところわからないが、一九四九年一月からは「連合軍総司令部外交局」にも勤務するようになった⁽³⁸⁾。追放したにもかかわらず、GHQは金子を重用していたように見える。

この点について、金子は次のように回想している。
司令部がぼくをページにおいて、今度はぼくを

雇っている。あれは係が違うから構わないと言うんです(笑)。ぼくは司令部のポール・ラッシュユのところへ行つたの。そうしたら、おまえはみんなからいろんなことを言いつけられた。一説に依ると高松先生とか菅先生等が司令部に働きかけてページを現実させたことだ⁽³⁹⁾。

GHQにも出入りできるという経歴がもの言つたのか、金子については縣康とほぼ同じ一九四五年一月から、C I C 四四一支隊首都八〇班が金子の再審査を行なっていた。だが縣とは異なり、一九四六年五月一〇日に以前の教職の地位に戻るのには好ましくないと報告した⁽⁴⁰⁾。その具体的な理由はよく分らない。ただ、縣の回想の中に次のような一節がある。

私とほぼ同じ頃に指令取消を申請したある人について、ラッシュユ氏は「彼は立教を卒業し、聖公会の援助のもとにアメリカに留学した。しかるに、この信仰の危機に臨んで、何ら立教のために積極的擁護をしていない。だから彼の解除の申請は受け付けられない」と私に漏らした⁽⁴¹⁾。

縣は金子とは明言していない。だが再審査の時期やアメリカへの留学経験など、前後の状況からその可能性は低くはない。

とはいえ、戦時中の具体的な行動については、人に

よって見解が食い違うことも多く、その評価は容易ではない。また後で見ると、他の関係者の再審査にあつては、教育や宗教を取り扱うCIE、ポール・ラッシュの所属していたCICといったGHQ内部の各セクション、さらには立教大学の思惑が複雑に関わっており、単純に評価することはできない。

いずれにせよ、金子の追放解除は一九五二年になってからのことになった。追放解除後の金子は、一九五三年四月立教大学文学部講師として立教に復帰するとともに、一九五三年一〇月には立教大学文学部教授となり、一九六六年三月に定年で退職している。⁽⁴²⁾

(2) 小沢淳男 (学生主事)

小沢淳男は一九〇二年生まれ、一九二七年立教大学文学部哲学科を卒業後、文学部助手を経て一九三二年に予科教授、一九三八年からは文学部教授を兼ねるようになり、論理学の授業を担当していた⁽⁴³⁾。さらに一九四四年には立教大学学生部主事、報国団主事となり、学生の生活指導にも大きな影響力を持つようになった。

戦時中の彼の行動については、卒業生と結託して学校からのキリスト教の追放を主張したなどとして、辻莊一は名指しで非難している⁽⁴⁴⁾。また縣康も同様の証言をしているが⁽⁴⁵⁾、実際のところはよくわからない。

ただ、一九四二年九月には、阿部三郎太郎の強い影響下にあつたボクシング部の学生から襲撃された「学生暴行事件」の当事者とされるなど、当時の学内における対立構造の渦中にいたことは確かなようだ。「細入メモ」によれば、小沢は宮崎伊佐夫とともに、辻莊一らと激しく対立していたとされている⁽⁴⁶⁾。小沢と対立していた辻の証言は、必ずしも信頼できるものではないが、一九五二年まで小沢の追放が解除されることはなかった。小沢はその後も立教に復職することはなく、秋田短期大学の創立に参画するとともに、その教授となった。秋田短期大学はその後秋田経済大学に改組されたが、一九八二年に退職するまでそこで教鞭をとった⁽⁴⁷⁾。

(3) 柴田亮 (学生主事)

一九〇二年生まれの柴田亮は⁽⁴⁸⁾、立教大学文学部史学科在学中から「秀才の誉」が高く、一九二八年に卒業後は、予科長であつた小林秀雄の推薦でただちに予科教授に就任した⁽⁴⁹⁾。卒業論文の題目が「尾張美濃におけるヤソ教について」であつたことからわかるように、キリスト教を研究対象としていた。

戦時中は小沢らとともに、学生主事を務めていた。「細入メモ」によれば、柴田も小沢淳男や宮崎伊佐夫とともに、辻莊一らと対立するなど⁽⁵⁰⁾、学内での対立構造

の一翼を担っていたとされる。彼の場合も一九五二年になるまで追放は解除されることなく、その後も立教に復職することはなかったが、戦後もキリシタン関係の論文を発表するなど、研究は続けていたようだ⁽⁵¹⁾。

(4) 和田正俊（教務課長）

立教大学出身であった小沢や柴田と異なり、和田正俊は一九二八年に東京帝国大学文学部支那哲学科を卒業した人物であった。卒業後は立教大学予科教授となり、漢文の授業を担当していた⁽⁵²⁾。また教務課長を務めるなど、学生部関係者が多くを占めていた他の人々とは、多少プロフィールが異なっている。一九四五年一〇月の追放指令に名前が含まれているが、「細入メモ」にも名前が登場しないなど、戦時中における具体的な行動や人間関係はよく分らない。和田の場合も一九五二年まで追放は解除されず、立教にも戻ることにはなかった。戦後の和田の具体的な経歴はよく分らないが、一九七〇年代でも文筆活動を続けていたことは確認できる⁽⁵³⁾。

5、追放解除と復職をめぐる

ここまで見てきた三名が、なぜ追放が解除されなかったのかはよく分らないが、少なくとも、GHQがその可

否について、それほど深く追究したことは確認できない。だが、追放解除の是非をめぐる、さまざまな意見が噴出し、数多くの調査が行われた場合もある。それがこれから見る武藤安雄と阿部三郎太郎のケースである。

(1) 武藤安雄（図書館長）

・武藤安雄の人物像

まず武藤安雄から見ていこう。

一八八九年に福島県に生まれた武藤は、福島県立会津中学校を経て立教中学校に転校し、一九〇七年に卒業している⁽⁵⁴⁾。後に立教中学校長や立教大学文学部長を務めた小島茂雄とは、立教中学校時代に同級生であった⁽⁵⁵⁾。武藤はその後早稲田大学英文科を経て東京帝国大学英文科選科で学んだ後、立教中学校、立教大学で教えるようになった。立教に勤めるようになってからも「小島茂雄先生と大の仲良し」で、一緒に新宿の小劇場に浪花節を聴きに行ったり、家で将棋を指して過ごすような間柄だったという⁽⁵⁶⁾。小島は、一九三六年のいわゆる「学歴詐称」事件で立教を追われるが、その後、事実上小島の勢力を受け継いだのが武藤であった⁽⁵⁷⁾。

武藤は中学校では寄宿舎の舎監、大学ではバスケットボール部の部長を長く務めるなど、学生生徒の生活にも深く関わっていた。一応専門は英語であったが、研究者

というよりは教育者としての性格が強い人物であった。武藤は一九六四年に死去するが、その一周忌に際して教え子や同僚が中心になって追悼文集を編んでいることから、人望を集める人物だったことは確かだろう。「学生から親しまれたことは事実であるが、親しまれ過ぎ、余りに「うちのおやじ」扱いされ過ぎ」(松下正寿)という評があるほど、立教での生活に入れ込んでいた人物であった。

戦時中には、学徒出陣する学生を「何たる名誉ぞや、何たる光榮ぞや、さらば往け、学徒諸君、往け」といった言葉で送り、⁽⁵⁹⁾ 日の丸に「武運長久」「祈必勝」の文字を積極的に書き込んでいったという。⁽⁶⁰⁾ こうした行ないは後世からみると、戦地に赴く「学生の深刻な悩み」を察することのない無神経な姿勢⁽⁶¹⁾、と非難されても仕方がないところはある。

だが一方では、「熱心な信仰者でいらっしやっただけに、太平洋戦争中の御苦労は言語に絶するものがあつたと聞いて居る」とか、「立大が使命としているものと、国が押し付けたものを終戦時まで苦労して調和の状態に持ち続けた」⁽⁶²⁾、さらには「戦時中院チャペルが破壊された時、その形骸を見て思わず歎声をもらされた」⁽⁶³⁾ といったように、戦中においてもキリスト教を守ることには腐心したという証言もある。武藤が戦時中にどのよ

うなふるまいをしていたのかは、今一つわからないこともあるが、戦争遂行に積極的に協力したことと、キリスト教の信仰を守ったことは、実態としては十分両立することであった。

・武藤の再審査

もちろん武藤は、追放は不当であり「早く濡衣を脱いで、もう一度立教の教壇に立ち度い」⁽⁶⁴⁾と考えていたようだが、追放直後にはその望みがかなうことはなかった。

事態が動き始めたのは一九四六年四月六日に聖公会の神父桜井健がポール・ラッシュに書簡を送つてからであった。栃木県の小山修道院にいた桜井は、以前から武藤と親しかったようだ。⁽⁶⁵⁾

桜井は、戦時中におけるチャペルへの冒流行為について、興味深い噂を耳にしたという。それは、配属将校飯島信之大佐が反キリスト教運動を主導しており、彼の命令によってチャペルを破壊したものだといふものであった。

だが、それは事実ではないと桜井は指摘する。

飯島大佐はキリスト教徒ではなかったが、多くの軍国主義者と同じようにキリスト教に反対していたわけではない。彼は正義の人であり、不義を憎んだ。彼の直情径行な性格は、多くの大学関係者から嫌われた。だが立教は、彼が極端な国家主義者からの攻

撃に対して戦ったことに感謝しなければならない。彼はチャペルに一步も足を踏み入れたことはなかったが、そこが神社や寺と同じように神聖な場所であることは理解していたのである⁽⁶⁵⁾。

後で触れるように、飯島は多くの立教関係者が口を極めて罵る評判の悪い配属将校であり、こうした評価を知っていると、にわかには信じがたい内容だ。戦時中桜井は、栃木県小山町の修道院で生活していたので、こうした当時の立教内部の状況についての観察や主張は、武藤自身によるものだと見ていいだろう。

さらに六月七日には武藤安雄自身もCIE局長に書簡を送っている。武藤はここで書簡を送るのはポール・ラッシュの示唆によるものだとした上で、CIEに追放の解除と大学への復職を直接要求した。彼は、自分が戦時に大学図書館長を務めていたことは確かだが、欧米の大学におけるそれとは異なり、当時の立教では大学の行政に直接責任を持つ立場ではなかったことを主張するとともに、戦時中の自らの処し方については、ここでは詳しく触れず小山修道院の桜井神父が証言してくれるはずだと述べている⁽⁶⁷⁾。

こうした一連の要求を受けて一九四六年六月一日、CISはCIEの依頼に基づき、CIC第四四一支隊に武藤の再調査を実施するよう指示した。その際、「信頼

できる」参考資料として、「細入メモ」が渡されている⁽⁶⁸⁾。そこには戦時中の立教における派閥対立が具体的に描かれていた⁽⁶⁹⁾。

「細入メモ」により、GHQが戦時中の立教内部の対立構造をはつきりと認識したことは、武藤とその他の関係者の再審査を進める上で、大きな影響があった。

こうした状況のもとで東京を担当するCIC第二五地区本部⁽⁷⁰⁾が武藤についての調査を進め始めたのは、一九四六年九月ごろであった。

CICの特殊諜報員四八四八が最初に接触したのが、学院チャプレン竹田鉄三⁽⁷¹⁾だった。インタビューは九月九日に行われたが、その際竹田は、武藤は戦争が始まるとすぐに、完全に態度を変えた。宗教的な態度を順守しなくなっただけでなく、戦時中、反キリスト教主義に転じたなどと主張した⁽⁷²⁾。

竹田は戦時中の武藤の身の処し方については、かなり厳しい見方をしていた。だが竹田はその一方で次のようにも続ける。

武藤が飯島と突然仲良くなったのは、あくまでも表面的なものだったのだろう。なぜなら武藤は、私に深い宗教的信条を誓っていたからだ。武藤が宗教的な抑圧やチャペルへの冒瀆に関わっていたとは信じがたい。全体として見れば、武藤は誠実かつ公正で、良心的な人物

だ。ただ悔い改めのためにも、もう少し学校から離れている時間を延長してもいいのではないかと付け加えた。竹田は、戦時中における武藤の振る舞いについては、決してほめられたものではないとしつつも、基本的には追放の容疑については否定した。

翌一〇日にも、佐々木順三、沢田文雄、田中シンキチという三人の人物のもとを訪れている。佐々木は言うまでもなく、当時の総長だが、彼は武藤については、佐々木が立教に来てからのことしか知らないとして、コメントを避けた。

一方事務職員である沢田と田中は、学生時代から武藤に親しく接していた。彼らは、武藤は忠実なクリスチャンであり、宗教に対する犯罪に関わったとは信じがたい。武藤は戦時中に配属将校を務めた飯島大佐と親密な関係にあったことは、彼の学内における評判を悪くする影響があったかもしれないが、武藤はただ大学に対する飯島の極端な行動を和らげたただただ、などと武藤を強く弁護した。

その上でさらに次のように続けたという。

武藤は、前学生主事阿部三郎太郎と個人的な確執があったにもかかわらず、同僚たちから好かれていた。そして武藤が軍国主義や国家主義、反キリスト教主義的な発言をしているのを見たことがない。

こうした沢田や田中の証言からは、武藤の卒業生に対する影響力の強さを見ることができるともいえる。また武藤が阿部三郎太郎と深刻な対立を抱えていたことを認めていることにも注目したい。

立教関係者への聞き取りは連日続いた。特殊諜報員四八四八は、翌二一日には柴田亮の自宅を訪れ、その話を聞いている。すでに触れたように、柴田は戦時中予科教員を務め、一九四五年一〇月に追放された一人名の一人である。

柴田は、戦時中武藤と同僚だったが、「学校の方針が変更になった時」、つまり寄附行為からキリスト教主義を削除した時には、自分も武藤もこうした決定に関与し得るような責任ある地位にいたわけではない。責任があるとすれば財団法人の理事長であった松崎半三郎こそ、その当事者であると主張した。またその上で、戦時中に武藤が反キリスト教的な言動をするのを聞いたことがないとも付け加えた。

特殊諜報員四八四八の関係者への聞き取りはさらに続き、九月一二日には藤原守胤（アメリカ研究所所長）と根岸由太郎（文学部教授）から話を聞いている。藤原は武藤が研究所の図書を利用するために頻繁に訪れていたことから接触があり、根岸は、築地時代の立教から四〇年来の親交があったという。

この二人も、武藤が大学の意思決定に関与できるような存在ではなく、大学の一般の教員以上の存在ではなかったと述べた。また、武藤が青山三一教会の熱心な教員であり、常々反軍国主義的な姿勢を持っていたと断言した。ただ、武藤は配属将校であった飯島大佐と親しかったのも認めている。しかしそれはあくまで個人的な関係に止まるものであったとも付け加えた。

特殊課報員四八四八は、さらに続けて同じ日に財団法人立教学院理事長松崎半三郎にも会っている。松崎は、古くから武藤のことは知っているが、あくまでも公式上の関係に止まるものだったとした上で、次のように述べた。

武藤は、ずっと敬虔なクリスチャンとして知られていたし、宗教的な儀式にもほとんど出席していた。そうした宗教的な観点からすると、彼を宗教的な弾圧や大学チャペルの閉鎖に関わったという理由で辞職させることはできなかったが、同時に過去の記録は、武藤がこれ以上大学にいることは望ましくないということを示している。だから武藤を大学から追放したことは適切だった。それはチャペルへの蛮行に参加したからではなく、大学の評価を下げる行いを継続的に行なったからだ。

松崎は財団法人の理事長であり、経営に関する最高責任者の地位にあった。その松崎が、武藤が戦時中におい

ても反クリスト教的行為にも関わらなかつたということを知りつつも、なお武藤が立教に返ることを望んでいなかったのである。

特殊課報員四八四八は、さらに図書館司書津久井安男にも、同じ日にインタビュウしている。

津久井も、武藤が戦時中も基本的には敬虔なクリスチャンであったことは認めた。ただ同時にチャペルが閉鎖されたり破壊された時に、なぜ武藤が反対しなかつたのかという疑問を抱いていた。また津久井は、飯島が学内のクリスト教をかく乱しようという意図を持っていたのに、武藤は飯島と仲良くし続けたとも指摘した。

特殊課報員四八四八は、こうして関係者への聞き取りを入念に済ませた上で九月十七日、ついに武藤自身に対するインタビュウに踏み切った。

武藤は自らのキャリアについて簡単に振り返った後、戦時中のことについて次のように語った。

一九四四年図書館長に就任すると、飯島大佐と知り合うようになった。そうして歴史や哲学、宗教についての本を読むために図書館を頻繁に訪れるようになった飯島に魅了されるようになった。こうして武藤は飯島と親密な関係となり、時には一緒に歩くこともあった。また飯島は、チャペルから持ち去られた椅子を取り戻そうとしたりするなど、実際には宗教には気を使っており、むし

ろそうした行動に対して責任を感じて切齒扼腕していた、という。武藤は、自分の名前がパージリストに入っていたのは、まったく理解しがたいと主張した。

武藤は、戦時中に飯島大佐と親交があったことを認めだが、その姿勢は特殊諜報員四八四八には、苦しい言い訳に聞えたようだ。彼は報告書に次のようなコメントを付け、武藤への不信感をあらわにしている。

インタビューを実施したうち何人かは、武藤への個人的な嫌悪感を示し、武藤のディフェンシブな発言に対する反対を強調した。飯島に関する武藤の証言は、他の全ての対象者とは対照的であり、武藤の証言の信憑性に疑問を投げかけたのである。

こうした特殊諜報員の個人的印象とは別に、調査の過程では戦時中の武藤が、反キリスト教活動に従事したという明確な証拠が出てこなかったことも確かだ。

これを受けて、九月二六日C I C Cの管理官ノーマン大尉は、次のように報告書をまとめた。

調査は、武藤が立教に在職中、深く宗教的で教会の柱であるという評判を得ていたが、同時に機会主義者であり、意地悪な性格の持主だということも明らかにした。インタビューの際に関係者は口を揃えて、武藤は追放の理由になるような「信教の自由の侵害」とは何の関係もなかったと証言した。武藤の唯一の過失は、配属将校飯

島大佐と親しくしていたことだが、学校の方針に影響を与えるようなものではなかったように見える。さらに言えば、学校の方針に影響を与えるような責任ある地位に就いていたわけでもない。恐らく武藤が追放されたのは、手のひらを返すような、嫌らしい身のふるまい方の結果である。だから、元の責任のない地位に復職させるべきだ。

C I C Cの報告を受けて、教職追放を直接所管するC I E Eは一九四六年一月二〇日、武藤に関して追放に該当するような証拠は確認できなかったと結論づけた⁽⁷³⁾。こうして一九四七年一月二七日に武藤安雄は追放を解除され、立教大学に復職することになったのである⁽⁷⁴⁾。

・配属将校飯島信之

武藤の追放にあたっては、配属将校であった飯島信之大佐との関係が強く影響していたことは明らかだ。飯島は、多くの立教関係者が「鬼の配属将校⁽⁷⁵⁾」とか「狂的愛国主義者⁽⁷⁶⁾」と評するようなフアナティックな軍国主義者であり、文学部の学生を「文弱部」と呼んで目の敵にした人物だったとされる⁽⁷⁷⁾。こうして伝えられてきた飯島像からすると、およそ学術や文化に理解があったとは思えない。

ところが武藤が自ら語るところによると、飯島と親交を持つようになったのは、一九四四年に武藤が図書館長

をしている時に、飯島が歴史や哲学、宗教についての本を読むために図書館を頻繁に訪れるようになったことがきっかけだったとしている。

一般に流布されている飯島のイメージと、図書館で読書や思索にふけるような行動の間には大きな落差があるが、武藤は追放を逃れるために苦し紛れに適当なことを吹聴していただけなのだろうか。

実は当時の立教関係者にも、一般的なイメージとは異なった飯島の一面を見た人物もいる。

当時、経済学部⁽⁷⁸⁾の学生であった菅井勇造（戦後、桃山学院大学教授）は、「欧米憎悪には狂信的なものがあつた」とか、「感覚は時代離れたものであつた」などと、大方の飯島像を裏書きするようなことを述べる一方で、次のように飯島の自宅を訪問した時のことを回想している。

軍服を脱いでしまえば、自宅での飯島大佐は礼儀正しい人であつた。謹厳な頑固じいさんという感じではあつたが、懲罰というようなことではなく、鄭重に接待してくれた。書斎の三方は書棚で囲まれていた。吉田松陰や山家素行の著書が大半であつた。それに日本精神論の書籍が多数あつた。この書斎の雰囲気から、この人は日本精神の研究をしている学者かもしれない？と思つた。⁽⁷⁹⁾

菅井は、飯島に「頑固じいさん」であるとともに、非常な読書家としての一面を見ていたのである。また予科生であつた緑川亨（戦後、岩波書店社長）も、飯島がポール・ヴァレリーの詩をフランス語で諳んじていたことを記憶している。⁽⁷⁹⁾

飯島信之は、一八八六年に広島で生まれている。⁽⁸⁰⁾父浦太郎は梅坪と号し、大阪師範学校で学んだ後、長年岡山師範学校で教鞭をとつた漢学者であつた。⁽⁸¹⁾信之自身も漢学⁽⁸²⁾に造詣が深く、趣味で漢詩を詠むような環境で育つていた。

こうした背景を持つ飯島が、「漢学の素養も浅からず」とされた武藤安雄と、大学図書館で互いに親交を深めたとしても、必ずしも不自然とは言えない。武藤が飯島に接近した意図は、そう単純なものではなかったのかもしれないが、少なくとも苦し紛れの出まかせだったわけではないようだ。

いずれにせよ飯島は、配属将校として戦時中の立教大学の動向に大きな関わりがあつたことは確かだ。GHQも戦時中の立教における一連の反キリスト教的な事件に飯島に責任があつたものとみなし、立教関係者を追放するよりも前の一九四五年一〇月二二日、日本政府に飯島の逮捕と大森収容所への移送を指示していた⁽⁸³⁾。だが飯島はすでに健康を害しており、東京第一陸軍病院で一

月一三日に死去した⁽⁸⁴⁾。結局、戦時下の立教についての一言も語ることなく世を去ったのである。戦時中に「何となくやかまし」⁽⁸⁵⁾かつた飯島が、多くの立教関係者から忌み嫌われていたことは確かだが、戦後は「死人に口なし」、どれほど責任を押し付けても実害のない便利な存在になったとも言えよう。

(2) 阿部三郎太郎 (学生主事)

・阿部の人物像

次に阿部三郎太郎のケースを見てみよう。一八九三年生まれの阿部は、一九二四年に東北帝国大学理学部物理学科を卒業し、一九二七年に立教大学予科に着任した。一九二九年には水泳部長にも就任している。一九三三年には自ら三万円の前金をして大学にプールを建設し、多くの部員をベルリンオリンピックに出場させることに努力するなど、「水泳立教の恩人」であり「熱心なクリスマスチャンで人格者として」知られていた⁽⁸⁶⁾。専門は数学だが、やはり武藤と同じように研究者というより、教育者としての性格が強い人物だったようだ。

それだけに、一九三〇年代に激しくなってきた学内での勢力争いにも深く関わるようになっていったようだ。「細入メモ」では、経済学部長だった河西太一郎と親しく、武藤安雄らとは激しく対立していたとされている。

後で触れるように、戦後になって河西は、GHQに阿部を擁護する書簡を提出している。

阿部がCIEに書簡を送り、自ら再審査と追放解除を訴えるようになったのは、一九四七年五月一六日のことだった。この中で阿部は次のように自らの事情を説明している。

戦時中、決定に関与できる地位にあったわけではなく、総長であった遠山郁三、三辺金蔵や学監帆足秀三郎の指示に従うほかなかった。キリスト教色の払拭に努めたどころか、軍国主義の犠牲者だった。戦時中も敬虔なクリスマスチャンであったことは、須貝止(日本聖公会主教)、蒔田誠(日本聖公会主教)、遠山郁三(元学長)、三辺金蔵(元総長)、帆足秀三郎(元学監)、河西太一郎(元経済学部長)らが保障してくれている。一九四四年のチャペル破壊は私のまったくあずかり知らないところから起こった事件だ⁽⁸⁷⁾。

阿部はこのように戦時中の容疑がかけられている問題について反論し、身の潔白を主張した。阿部自身による弁明だけでなく、須貝、蒔田、帆足、河西ら、聖公会および立教大学の主要人物が阿部を擁護する書簡も同時に提出されている。なお、ここに挙がっている人物の多くは、他の被追放者の弁護の際にも書簡を提出しているが、河西太一郎は阿部以外の人物を擁護していることは

確認できない。河西と阿部の関係の深さをうかがうことができる。

・阿部の再審査

これらの状況を受けて、GHQは阿部の再審査を決定した。ところが、一月一日、財団法人立教学院理事長松崎半三郎と立教大学総長佐々木順三という、立教の両首脳が連名で書簡を送ってきた。松崎と佐々木は主に次のような理由から阿部の復職に否定的な見解を述べた⁽⁸⁾。

阿部は、戦時中キリスト教徒としての立場を守ることができず、宗教活動を放棄することに血道を上げていた。阿部は、その党派的活動によって大学の管理に影響を及ぼし、それまで長年にわたって築いてきた大学の伝統を破壊し、国家主義的な雰囲気が主流となった。危機の数年間、学生課長としてその影響力を立教の基本的な要素を破壊することに力を注ぐ方が、阿部にとって容易な選択であった。GHQが一人のリストに阿部を入れたことは正しい判断であったし、同様の理由で我々は阿部が復職することを望んでいない。立教大学の再生と復興のためにはふさわしくない人物だ。

松崎と佐々木という立教の経営・教学上のトップが揃って、阿部の復職に対して拒否反応を示した。それは主に阿部の「党派的活動」を問題視したものだ。

こうした告発にもかかわらず、GHQは戦時中の阿部の行動について、軍国主義的かつ反キリスト教的行動をしたという具体的な証拠を見つけることはできなかった。阿部を擁護する多くの関係者の書簡が揃って指摘するように、戦時中の阿部はむしろ軍国主義に否定的で、キリスト教徒としての信仰を守ったという証言が多かったのである。

とすれば、現在の立教の首脳部が阿部の復職に反対するのは、別の問題を懸念していたことになる。つまり、「細入メモ」をはじめとするさまざまな史料が示してきたように、学内における対立構造の当事者であったことを問題視していたのである。

もちろん、立教の首脳部が、被追放者の復職に反対したのは、阿部が初めてだったわけではない。先にも触れたように、辻莊一の際にも、ポール・ラッシュは松崎らが辻の復職に否定的だったと述べていたし、武藤の際にも、松崎が復職に反対する書簡を出している。だが、経営上と教学上のトップが揃って直接反対するという事態は初めてだった。

阿部の調査にあたっていたG2は、一月二二日にCIEに対して次のような意見を出している。

阿部に関する過去の記録から判断する限り、われわれは、彼が大学の再出発にとって障害になる人物だ

とみなさざるを得ない。われわれはこれ以上の混乱ではなく、平和と統合を望んでいるのだ。⁽⁸⁹⁾

「細入メモ」などによって、戦時中の立教における対立構造について、かなり詳しく知るようになったGHQは、立教の内部事情に配慮せざるを得ないと考えるようになっていたのである。

教職追放を直接所管するCIEは、基本的には信教の自由の侵害があつたかどうかが問題であり、それ以外の要素が入るべきではないという立場を取り、⁽⁹⁰⁾ 戦時中の阿部の行動に関しては、縣、武藤、辻と似たようなケース、つまり軍国主義に積極的に加担した証拠はないと判断していたが、⁽⁹¹⁾ 同時にこうした立教の学内状況にも配慮せざるを得ないようになっていった。

一九四七年一月二九日のCIEの報告書は「立教の総長による純然たる学内行政を制限してはならない」として、次の三つの選択肢を取ることを提案している。⁽⁹²⁾

A案 阿部を元の地位に戻す必要はないという声明を出すという方法。

復職の際に、阿部は元の地位に留まることは要求されないという声明を出す。

この計画は、総長の現在の計画に対する不幸な干渉をうまく防止することができる。

B案 地位を維持する必要はないことを総長に非公

式に知らせるという方法。

C案 立教以外の教育機関のどこかに職を与えようという方法。

CIEが選択したのは、さらに将来における困難を未然に防ぐには、B案つまり、阿部が復職したとしても、それを維持するかどうかは立教側の判断に委ねるというものであつた。具体的には、阿部は公式には三〇日以内に大学に復職するが、その後それを維持するかどうかは、内部の問題として大学当局に委ねられることを示唆したようだ。⁽⁹³⁾

こうしてGHQは一九四八年一月四日に阿部三郎太郎の追放を解除するとともに、立教大学への復職を命ずる指令を発した。⁽⁹⁴⁾ だが実態としては、阿部は二月一三日付でいったん立教大学に復職したにもかかわらず、「病氣」で職務が執れない状態となつたとされている。⁽⁹⁵⁾ その後の詳しい経緯は不明だが、結局阿部が立教大学に戻ることにはなかつた。

予科で同僚であつた縣康は、阿部との関係について次のように述べている。

水泳部を育てた部長は数学の教授阿部三郎太郎氏である。しかし同氏は、終戦直後の、例のマッカーサー指令で追放になり、厳格に一切の教育機関への出入りも禁じられてしまった。私も一緒に追放され

たのだが、幸いにして私は他の人達よりも早く追放解除になった。懇意な阿部氏からも懇請されて、その後任を仰せつかったのであった⁽⁹⁶⁾。

縣は、「キリスト教など立教に用はない、と放言した某学部長がいた。また、天皇は神である、と力説する教授もいた。「あら人神」の「上御一人に帰し奉ればよい」などと言っていた哲学者だのフランス文学者だのもいた⁽⁹⁷⁾」として、戦時中時局に迎合したり、軍国主義的な行動をとった人物に対する敵意を示しているが、少なくとも阿部に対してはこうした感情を抱いてはおらず、戦後も親交があったことがわかる。

また、水泳部の出身者のひとり阿部が「敬虔なクリスチャン」であり、戦後追放となつて駒込に隠棲した後も、常に教え子のことを気にかけていたことを回想している⁽⁹⁸⁾。

・経済学部長河西太一郎

阿部の復職を後押ししようとした人物の一人に、戦時中に経済学部長であった河西太一郎がいたことは先に触れた。追放された立教の教職員の中で河西が復職のために動いたことが確認できるのは、この一例だけである。河西と阿部は戦時中関係が深く、先に出てきた武藤安雄などと激しい対立を繰り広げたとされることは、本稿でたびたび触れてきた。

一八九五年生まれの河西は、東京帝国大学法学部を一九二〇年に卒業後、大原社会問題研究所を経て、一九二三年から立教大学教授を務めていた。東大在学中は、新人会の創設に参画するなど社会運動に関わるとともに、卒業後は農業問題の専門家としていくつかの著書を発表していた⁽⁹⁹⁾。

河西は一九四一年五月に経済学部長に就任したが、一九四三年七月に大学を辞職している⁽¹⁰⁰⁾。河西は経済学部教授であった田辺忠男らと学内で激しく対立していた。これは彼が当時左翼的立場を取っていたという側面もあつたが⁽¹⁰¹⁾、それ以上に一九三〇年代から顕在化してきたより広範囲な学内対立を背景としていた。河西は山下英夫といった経済学部の教員だけでなく、辻や阿部といった予科の教員をも自らの勢力に取り込んでいた。こうして予科教員らも巻き込んだ対立は、一九四二年後半には激しさを増していた。すでに触れたように「学生暴行」事件なども発生するなど、抜き差しならない状況に陥っていた⁽¹⁰²⁾。「細入メモ」によると、一九四三年に赴任した三辺金蔵の最初の大きな仕事は、河西や田辺を大学から一掃することであつたという⁽¹⁰³⁾。実際、一九四三年には河西だけでなく、田辺忠男（経済学部教授）、松下正寿（経済学部教授）といった人々が相次いで大学を去っている。CIE資料によれば、学校側は河西の辞職

理由を「転職のため」とのみ説明しており、⁽¹⁰⁴⁾ 具体的な経緯は記していない。

なお、この間立教学院および立教大学では、寄附行為や学則からキリスト教に関する文言を削除する変更を行っているが、学長であった遠山郁三の日記によると、河西は一九四二年九月に学則から「キリスト教主義の文字抹殺⁽¹⁰⁵⁾」を要求する発言を行なっている。遠山は日記に、配属将校や教員、卒業生からのさまざまな要求や圧力、時には脅迫を記しているが、キリスト教主義排除の直接的な要求があったことが確認できるのは、河西によるものだけだ。

戦後、一九四六年一月に立教大学に復職しているが、その際には学内から復職に反対する声が上がった。具体的には、学部長代理の須藤吉之祐やアメリカ研究所長藤原守胤らが、河西が戦時中に公金を費消したとして、その復職に反対したという。『立教大学経済学部一〇〇年史』では、それが「冤罪であることが、完璧に証明された」としているが、⁽¹⁰⁶⁾ その当否はともかくとして、これまで触れてきた戦時期から戦後にかけての学内での状況をふまえるならば、復職への抵抗には単に金銭関係や政治的立場といった問題だけでなく、学内での対立構造や人間関係が大きく作用していたと考える方が自然だろう。復職後の河西は一九四六年五月に経済学部長に就任

し、一九五九年まで務めた。その間、一九四七年一二月には洗礼を受け、トマスというクリスチャンネームを持つようになった。⁽¹⁰⁷⁾

一九四八年には、学内で『アカハタ』を頒布したという理由で学生を退学処分にしたことについて、「真理・自由大いに結構、然し本学には建学精神があるからね、建学精神に反するものは放校してもやむをえん」などと言い放ったという。⁽¹⁰⁸⁾

戦時中のキリスト教抹殺発言にせよ、戦後の建学精神発言にせよ、いずれも河西が直接述べたり、記したりしたものではない。だが、これらの史料から知ることができる範囲では、その時々や場所、立場によって大きく言動がぶれる、ずいぶん機会主義的な人物だという印象は免れがたい。

すでに触れたように河西は、東大在学中に新人会で活動していた。新人会出身者の心性と行動については、古川江里子が詳細な分析を行っている。彼女は、東大法学部出身者が一九二〇年代以降、新人会のような社会運動に積極的に参加するようになった理由を次のように説明する。明治時代とは異なり、進路として官界にも産業界にも閉塞感を感じるようになった彼らが、新たな有望な分野として着目するようになったからだ。⁽¹⁰⁹⁾ つまり立身出世の手段として社会運動にコミットするようになった

のである。一見、脈略がなさそうに見える河西の行動も、こうした新人会出身者の心性に引きつけて捉えなすと理解しやすいかもしれない。

なお河西は、その後学校法人立教学院理事長などを歴任し、一九八六年に死去した際には学院葬を以って送られている⁽¹¹⁰⁾。

(3) 宮崎伊佐夫(学生主事)

阿部と同様に、追放を解除されながらも立教大学に復職しなかった人物に宮崎伊佐夫がいる。一九〇七年生まれの宮崎は一九三三年に立教大学文学部英文科を卒業し、一九四二年度から予科の専任教員になっていた⁽¹¹¹⁾。一九四四年からは学生主事も務めていた。「細入メモ」では、宮崎は武藤安雄の「子分」として、同窓生である小沢や柴田らとともに強力な派閥を形成し、辻莊一らと対立していたとされている⁽¹¹²⁾。

阿部の再審査が進んでいた一九四七年一〇月二三日、宮崎もCIEのヌージェント局長に書簡を送っている。この中で宮崎は、戦時中寄附行為や学則の変更に関与できるような責任ある地位に就いていたこともなければ、軍国主義や超国家主義に加担したこともないと主張している⁽¹¹³⁾。

こうした論理は、それまでに再審査の対象になった辻

や武藤、阿部などと基本的に共通するものであり、さらに三辺金蔵(前総長)、八代斌助(日本聖公会主教)、巽芳三郎(東京聖愛教会牧師)といった、聖公会や立教の関係者が宮崎を擁護した。これを受けてCIEは宮崎についても再審査を決めた。

調査の結果、CIEは宮崎の場合も縣、辻、武藤、阿部と似たようなケース、つまり宮崎が戦時中に立教で責任ある地位にあったわけでもなければ、キリスト教に対する蛮行に関与した証拠もないと判断していた⁽¹¹⁴⁾。

ところが、松崎半三郎理事長と佐々木順三総長は連名で、宮崎に対しても立教への復職に否定的な見解を示していた⁽¹¹⁵⁾。

少なくとも追放の容疑となった事項については潔白は証明されたと考えたCIEは、一九四八年三月二五日、宮崎伊佐夫の教職追放解除と立教大学への復職を指令した⁽¹¹⁶⁾。だが、実際には阿部の場合と同じように、その後の取扱いは大学内部の経営問題として、大学側に委ねられるという対応がとられた。

一九五一年一月に大学同窓会は、この宮崎伊佐夫のほか、小沢淳男、柴田亮ら、当時追放になっていた旧教員の立教大学への復職を要望している⁽¹¹⁸⁾。宮崎は、戦後も国学院大学で教えたり⁽¹¹⁹⁾、英語に関する著作を刊行⁽¹²⁰⁾するなどしているが、結局、宮崎を含めて彼らが立教に

戻ることはなかった。

おわりに

本稿では、一九四五年一〇月に立教から追放された
一一名の教職員について、その後の経過を中心に検討し
てきた。

一一名の追放だけに着目すれば、戦時中のキリスト教
主義に関わる事項がクローズアップされるが、一一名の
その後を追っていくと、むしろ戦時中における学内の対
立構造が浮かび上がってきた。それは、経済学部や予科
といった学内組織を越えた構造を持つものであり、同時
に政治的立場やキリスト教主義に対する態度が決定的な
争点というわけではなかったことも明らかとなった。

一一名のその後の歩みは、

- ① 速やかに追放解除されて立教に復職したものの。
- ② 追放解除されたが、立教には復職しなかったもの。
- ③ 占領終了まで追放解除されなかったもの。その後復
職したものとしなかったものがある。

に大きく分かれた。

追放を解除されるかどうかは、戦時中の実際の行動が
大きな判断基準となっていたが、立教に復職するかどうか
は、立教側、特に理事長松崎半三郎や総長佐々木順三

の意向がGHQの判断にも大きく影響を与えた。教職追
放を直接所管するCIEは、判断の基準はあくまでも戦
時中の行ないにあり、立教側の事情は斟酌するべきもの
ではないという原則を持っていた。その一方で立教側の
純然たる学内行政に介入するべきではないとも考えるよ
うになっていった。こうした葛藤の中で、直接の学内行
政の責任者である松崎や佐々木の意向を無視し得ないよ
うになっていったのである。

ただ、戦後立教にやってきた佐々木順三と異なり、松
崎半三郎は理事や理事長として、キリスト教主義の放棄
を含む戦時中のさまざまな決定に深く関与していたこと
も確かだ。

これに関して佐々木順三は「松崎さんはアメリカから
よほど信用されていたのでしょね。パージになった職
員の中には、理事長にも戦時中の責任がある。自分たち
だけがパージになる理由はない、といってG・H・Qに
請願書を出したのもありました。G・H・Qでは、あ
くまで松崎氏を支持して、学院の再建を松崎さんに一任
したのです⁽¹²⁾」として、GHQ側が松崎に信頼を寄せて
いたことを回想している。

また、戦前に立教学院総理を務めたライフスナイダー
も

立教学院の危機に当たって常に私は松崎氏の元にゆ

き援助と忠告を受けたのであります。ことに立教学院が大学昇格の時、また医科大学設置運動への努力、続いて一九四五年の戦争後、東京帝国大学総長南原博士と相談の上佐々木順三氏を総長に迎えられた努力については心から感謝しております⁽¹²³⁾。

と述べているように、戦時中の寄附行為変更の当事者にもかわらず、アメリカ側から強い信頼を寄せられていた。本稿ではその要因について検討することはできなかったが、なかなか評価の難しい人物だということは確かだ。松崎に限らず、戦時中の言動や行動については、全く相反するような証言も少なくなく、何が真実なのか非常に見極めにくいのが実情だ。

さて、追放された教職員のうち、三辺や帆足といった大学や中学校の責任者を除いた予科教員の多くが、戦時中の内部対立に深く関わっていたとされる人々であった。こうした戦時中における内部対立については、当時予科講師であった細入藤太郎が作成した「細入メモ」に、くわしく描かれ、追放の再審査をめぐるGHQの動向が、それに大きく影響されたことも確かだった。

メモを作成した細入は一九一一年生まれ。立教大学文学部英文学科を卒業し、アメリカに留学後、一九四〇年四月に立教大学予科講師となっていた。戦後、一一名が追放されたのと同じ一九四五年一〇月に、彼は同予科教

授に就任している⁽¹²³⁾。

戦時中、細入は専任教員ではなく、兼任の講師であり「学校の首脳のうち外」⁽¹²⁴⁾にあったことは確かだ。そうした意味で客観性はある程度担保される。だが同時に、多くの予科教員が追放されると入れ替わるように、予科教授に就任していることにも目を向けねばならない。つまり多くの予科教員がいなくなったことで、その後彼が立教における英米文学科や一般教育運営の中心人物となっていく立場を得たと見ることもできる。

このように、立教における一一名の追放は、単に戦時中における立教の行動が問われただけでなく、戦時中における学内の人間関係をあぶり出し、戦後における人間関係を規定していったという点で大きな意味を持つものであった。

註

- (1) 立教学院百二十五年史編纂委員会編『立教学院百二十五年史 資料編 第一巻』（学校法人立教学院 一九九六年）四八三頁。
- (2) 山本礼子『占領下における教職追放』（明星大学出版部 一九九四年）一一～三三頁。
- (3) 立教大学立教学院史資料センター編『立教大学の歴史』（立教大学 二〇〇八年）一七七～一八六頁。
- (4) 増田弘『公職追放論』（岩波書店 一九九八年）二八二～三二六頁。

- (5) 縣康『神に生き教育に生き 立教とともに50年』（聖公会出版 一九九三年）二二二～二二五頁、「縣康先生に聞く①」『立教学院史研究』七号 二〇一〇年。
- (6) 前掲『立教学院百二十五年史 資料編 第一卷』五〇七～五一五頁。
- (7) 前掲『立教学院百二十五年史 資料編 第一卷』四七九頁。
- (8) 前掲『立教大学の歴史』一七七、一七九頁。
- (9) SCAPIN-183: VIOLATION OF RELIGIOUS FREEDOM 1945/10/24.
- (10) <http://bdke.econ.keio.ac.jp/psninfo.php?PsuID=32> 二〇一七年一月二八日閲覧。
- (11) 前掲『立教学院百二十五年史 資料編 第一卷』四八九～四九二頁。
- (12) 早崎八洲「帆足秀三郎氏をいたむ」『ニュース・セントポール』一六一号 一九六五年二月。
- (13) 前掲『立教学院百二十五年史 資料編 第一卷』五〇〇頁。
- (14) 前掲「帆足秀三郎氏をいたむ」。
- (15) 「帆足秀三郎氏逝去」『立教』三六号 一九六五年。
- (16) 前掲『立教学院百二十五年史 資料編 第一卷』五〇五頁。
- (17) 前掲『神に生き教育に生き』二一八頁。
- (18) 前掲『立教学院百二十五年史 資料編 第一卷』五〇五頁。
- (19) 明田川融訳・解説『占領軍対敵諜報活動 第441対敵諜報支隊調査書』（現代史料出版 二〇〇四年）頁。
- (20) Violation of Religious Freedom CIE (C) 00480.
- (21) 前掲『立教学院百二十五年史 資料編 第一卷』五〇八頁。
- (22) 原文では「タケダケンジ」となっている。聖公会の聖職者で立教学院チャブレンという肩書だが、正確にはこれに該当する人物は存在を
確認できない。一九四六年五月に竹田鉄三が学院チャブレンに就任している。「タケダケンジ」とは、おそらくこの彼のことと考えられる。
- (23) 前掲『立教学院百二十五年史 資料編 第一卷』五〇八～五一二頁。
- (24) 前掲『立教学院百二十五年史 資料編 第一卷』五〇九～五一〇頁。
- (25) 前掲『立教学院百二十五年史 資料編 第一卷』五一三～五一五頁。
- (26) 「辻莊一先生略歴」『音楽学』二二 一九六八年。
- (27) 前掲『立教学院百二十五年史 資料編 第一卷』四九五頁。
- (28) 前掲『立教学院百二十五年史 資料編 第一卷』四九三～五〇五頁。
- (29) 前掲『占領下における教職追放』一九頁。
- (30) Tsuji to Nugent, Dec. 27, 1946. CIE (C) 00479.
- (31) Recommended Action Concerning Tsuji, Soichi. CIE (C) 00478.
- (32) Petition of Tsuji, Soichi, for Reinforcement as Dean of St. Paul's University. CIE (C) 00479.
- (33) Tsuji petition, CIE (C) 00479.
- (34) 拙稿（史料紹介）一九三七年、木村重治博士時代以降の立教大学の歴史の回顧』『立教学院史研究』一四号 二〇一七年。
- (35) 前掲『占領下における教職追放』二二頁。
- (36) 「金子尚一君 助教授たらん」『立教大学新聞』一九二五年二月二〇日。
- (37) 「近く帰朝する金子尚一氏 帰朝後は本学教授に」『立教大学新聞』一九二九年七月二五日。

- (38) 金子尚一『回顧九十年 わが師 わが友 わが学園』（聖公会出版 一九九一年）三四〇、三四一頁。
- (39) 「金子尚一先生に聞く」『別冊英米文学 英米文学科のあゆみ』立教大学文学部英米文学研究室 一九九一年。
- (40) CIE (C) 00480, Violation of Religious Freedom.
- (41) 前掲『神に生き教育に生き』二二二頁。
- (42) 前掲『回顧九十年』三四一頁。
- (43) 奈須恵子・山田昭次・永井均・豊田雅幸・茶谷誠一編『遠山郁三日誌 1940～1943年』（山川出版社 二〇一三年）四九〇頁。
- (44) 前掲『立教学院百二十五年史 資料編 第一巻』四九六頁。
- (45) 前掲『縣康先生に聞く①』。
- (46) 前掲『史料紹介』1937年、木村重治博士時代以降の立教の歴史の回顧。
- (47) 「小沢淳男先生主要略歴・業績目録」『秋田経済大学・秋田短期大学論叢』三二一号 一九八三年。
- (48) 前掲『遠山郁三日誌』四八九頁。
- (49) 「本年度出の柴田君 予科教授に抜擢」『立教大学新聞』一九二八年九月二十五日。
- (50) 前掲『史料紹介』1937年、木村重治博士時代以降の立教の歴史の回顧。
- (51) 柴田亮「尾張国橋爪村切支丹の寛文五年迄の召捕」『史苑』一八巻 一号 一九五七年。
- (52) 前掲『遠山郁三日誌』四四五頁。
- (53) 山崎道夫・和田正俊『叢書・日本の思想家四八 吉田松陰・西郷南洲』（明德出版社 一九七九年）。
- (54) 武藤益蔵「弟の葬儀に臨んで」山口定男編『武藤安雄先生追悼文集』（武藤安雄先生追悼文行会 一九六五年）。
- (55) 穆亭生「小島校長を迎ふ」『立教』一九二〇年四月号（立教大学立教学院史資料センター所蔵）。
- (56) 呉文炳「武藤安雄先生の追憶」前掲『武藤安雄先生追悼文集』。
- (57) 前掲『史料紹介』1937年、木村重治博士時代以降の立教の歴史の回顧。
- (58) 松下正寿「武藤先生を偲ぶ」前掲『武藤安雄先生追悼文集』。
- (59) 山田昭次「学院首脳陣と構成員のアジア・太平洋戦争に対する認識と対応」老川慶喜・前田一男編著『ミッション・スクールと戦争』（東信堂 二〇〇八年）。
- (60) 高橋広「会津精神の持主」前掲『武藤安雄先生追悼文集』。
- (61) 前掲「学院首脳陣と構成員のアジア・太平洋戦争に対する認識と対応」。
- (62) 山本秀治「恩師をしのぶ」前掲『武藤安雄先生追悼文集』。
- (63) 高橋広「会津精神の持主」前掲『武藤安雄先生追悼文集』。
- (64) 片山民治郎「消えたおんたる」前掲『武藤安雄先生追悼文集』。
- (65) ケネス・アボット・ヴァイアル「武藤安雄氏を思う」前掲『武藤安雄先生追悼文集』。
- (66) T. Sakurai to Paul Rusch, April 6, 1946, GS (B) 03353 MUTO, Yasuo.
- (67) Mito to CIE, June 7, 1946, CIE (C) 00480.
- (68) Violation of Religious Freedom GS (B) 03353.
- (69) 詳しくは、拙稿「戦時下のキリスト教学校と基督教主義―学校間比較から見た立教の特徴―」および「史料紹介」1937年、木村重治博士時代以降の立教の歴史の回顧」『立教学院史研究』（二四号 二〇一七年）参照。

- (70) 前掲『占領軍対敵諜報活動 第441対敵諜報支隊調書』二九頁。
 (71) (70)でも原文は「タケタタンジ」となっているが、誤記と推定。
 (72) MEMORANDUM FOR THE OFFICERS IN CHARGE. GS (B) 03353. 特殊諜報員四八四八の活動については、特に断らない限り同資料による。
- (73) Recommend Action Concerning MIUTO, Yasuo, former Librarian at St. Paul's University. GS (B) 03353.
 (74) SCAPIN-154. REINSTATEMENT OF MIUTO, YASUO, FORMER LIBRARIAN AT RIKIYO UNIVERSITY 1947/03/04/
 (75) 『鈴懸の径 あゝわが青春の立教』(シンロー・ミュージック 一九八三年)八九頁。
 (76) 前掲『立教学院百二十五年史 資料編 第一巻』四九六頁。
 (77) 林英夫「友人たちと先生」立教大学史学会編『立教大学史学会小史』(立教大学史学会 一九六七年)。
 (78) 菅井勇造「配属将校の飯島大佐のこと」立教大学立教学院史資料センター編『立教大学昭18年卒業者会回想録原稿』二〇〇四年一〇月一九日(立教大学立教学院史資料センター所蔵)。
 (79) 前掲『鈴懸の径 あゝわが青春の立教』八九頁。
 (80) 飯島は一九〇七年に陸軍士官学校を卒業し(一九期)、同年一二月に陸軍歩兵少尉に任官している。その後、歩兵第一連隊(広島)、歩兵第七連隊(広島)、歩兵第二旅団副官(山口)、広島県師範学校配属将校など、広島県、山口県といった中国地方を中心に勤務した(『陸軍現役将校同相当官実役停年名簿』各年版)。
 飯島については、陸軍大学校も卒業していたという証言もあるが、これに関しては確認できなかった。また「陸軍大学校卒業生」の一覧(秦郁彦編『日本陸海軍総合事典』東京大学出版会 一九九一年)に

- も名前は掲載されていない。実際、陸士一九期で陸大を優秀な成績で卒業した今村均や本間雅晴、田中静彦といった面々に比べれば、飯島の昇進のスピードは明らかに遅く、陸大を出ていたとは思えない。だが最終的には大佐になり、会津若松の歩兵第二九連隊長を務めているので、いわゆる「無天」組としては順調にキャリアを重ねたといえるだろう。
- 立教大学の配属将校となった時期にはすでに現役ではなく、予備役将校を准現役として処遇する「特別志願将校」となっていたようだ(秦郁彦「第二次大戦期の配属将校制度」『軍事史学』四〇巻四号 二〇〇五年)。
- (81) 飯島浦太郎『桃李園詩鈔』(飯島信之 一九三七年)。
 (82) 中村信蔵「故武藤安雄先生をしのびて」前掲『武藤安雄先生追悼文集』。
 (83) SCAPIN-172. COLONEL NEBUYAKI HIJIMA, 1669 NICHOME, MEJIRO-MACHI, TESHIMAKU, TOKYO 1945/10/22.
 (84) 「飯島大佐病没」『読売新聞』一九四五年十一月一日。
 (85) 前掲「縣康先生に聞く①」。
 (86) 「ひとしほ祈る育ての親、水泳立教の恩人」『読売新聞』一九三六年八月一日。
 (87) Abe to Nugent May 16, 1947. CIE (C) 00478.
 (88) TO WHOM IT MAY CONCERN. CIE (C) 00478.
 (89) Petition of Abe, Mifurao for his Reinstatement. CIE (C) 00477.
 (90) 前掲『占領下における教職追放』二〇頁。
 (91) Reinstatement of ABE, Mifurao. CIE (C) 00477.
 (92) Memorandum for: Chief, Education Division. CIE (C) 00477-8.
 (93) Recommended Action Concerning Abe, Mifurao, former Professor and Student Inspector at St. Paul's University. CIE (C) 00477.

- (94) SCAPIN-1847: REINSTATEMENT OF ABE MIOTARO, FORMER PROFESSOR AND STUDENT INSPECTOR AT RIKIKYO UNIVERSITY 1948/01/14.
- (95) Action Concerning ABE, Motaro, Former Professor and Student Inspector at Rikkyo University. CIE (C) 00477.
- (96) 縣康「立大の学友会部長時代の思い出」『チャペルニュース』一九八八年六月。
- (97) 前掲『神に生き教育に生き』二二三頁。
- (98) 村田数雄「人生の師」『立教大学水泳部八十年誌』（立教大学水泳部OB会 二〇〇〇年）。
- (99) 藤田武夫編『河西太一郎先生在職三十五年記念論文集』（立教大学経済学研究会 一九六〇年）八〇五～八〇七頁。
- (100) 立教大学経済学部編纂委員会編『立教大学経済学部一〇〇年史』（立教大学経済学部 二〇〇七年）七二頁。
- (101) 前掲『立教大学経済学部一〇〇年史』六九頁。
- (102) 拙稿「戦時下のキリスト教学校と基督教主義」『立教学院史研究』一四号 二〇一七年。
- (103) 前掲「史料紹介」一九三七年、木村重治博士時代以降の立教の歴史の回顧」。
- (104) CIE (B) 06075, Rikkyo University (St. Paul's) - Tokyo.
- (105) 同右。
- (106) 前掲『立教大学経済学部一〇〇年史』七八頁。
- (107) 『トマス河西太一郎葬送式々文』（立教大学立教学院史資料センター所蔵）。
- (108) 日本共産党豊島区委員会「真理・自由よりも建学精神 呆れかえった河西教授の放言」CIE (D) 04049 Rikkyo University (Tokyo) - 1.
- Rikkyo University 2. Preparatory School 3. College of Science & Engineering.
- (109) 古川江里子「立身出世と」の社会運動——帝大新人会エリートたちの挑戦と挫折」『日本歴史』七〇二号 二〇〇六年。
- (110) 前掲『トマス河西太一郎葬送式々文』。
- (111) 前掲『遠山郁三日記』四七六頁。
- (112) 前掲「史料紹介」一九三七年、木村重治博士時代以降の立教の歴史の回顧」。
- (113) Petition, CIE (C) 00477.
- (114) Reinstatement of Miyazaki, Isao. CIE (C) 00477.
- (115) TO WHOM IT MAY CONCERN February 5, 1948 CIE (C) 0477.
- (116) SCAPIN-1871: REINSTATEMENT OF MIYAZAKI ISAO, FORMER PROFESSOR AND STUDENT INSPECTOR AT RIKIKYO UNIVERSITY 1948/03/25.
- (117) Memorandum for the Chief of Staff CIE (C) 00477.
- (118) 「同窓旧教授復職に同窓会動く」『立教大学新聞』一九五一年二月二〇日。なおこの際、大野信三と松下正寿についても復職が要望されているが、この二人は別の要因で追放となっていた。
- (119) 前掲「金子尚一先生に聞く」前掲「別冊英米文学 英米文学科の歩み」。
- (120) 宮崎伊佐夫『英語の構造』（白帝社 一九五三年）。
- (121) 電通編『松崎半三郎』（森永製菓株式会社 一九六四年）二五四頁。
- (122) 前掲『松崎半三郎』二五三頁。
- (123) 「細入藤太郎先生略年表」前掲『別冊英米文学 英米文学科のあゆみ』。
- (124) 「細入藤太郎先生に聞く」前掲『別冊英米文学 英米文学科のあゆみ』。